

現代の幸福感を超えて遠くに夢を

- 1、現代社会は、遠い将来のことはさておき、専ら当面のことの処理で明け暮れているように思われます。

数十年前までは、政治家も「国家百年の計」を語るのが普通でした。いまそうした言葉は口に出せない、というのも誰もずっと先き行きのこととは分からない時代になっているからでしょう。いや昔の人も分かっていた訳ではない、はっきり分からなくても夢を語っていた。それは、将来が可能性に満ち、そこに希望がもてたからだと考えられるのです。人間社会では、少なくとも2～3000年前からは、東洋でも西洋でも、久遠の理想や普遍の原理が説かれてきていたことは世界史の示すところです。

ところが現代は、物質的欲望の充足こそが人間の幸せであるという観念が世間を覆いつくし、精神の次元について語られることは非常に少なくなっています。物質的充実——それは眼に見えるもの、計算などによって実際に確かめられるものですから、遙かな将来については分かろうとしない感覚です。一定の条件、期間に限定されたもの、大いなる理想のもと未来を希求する方途ではなく、当然目先が課題になります。

- 2、確かにお金と財産は有難いものであり、それは、古来、世界でも日本でも、共通に昔話にも登場してきました。ただ、日本の昔話では、財貨の幸運に恵まれるのは、正直者や親孝行など徳行を積む人であるという筋書が大半です。

今日の経済活動は、こうした道徳訓とは無関係で、物質的成果それ自体が、無条件で成功と称えられます。

そして民主主義は、富の獲得の意欲を、少数の特権から社会の全域へ拡げ、資本主義の先進国である福祉国家は、後進世界の収奪の上に立って、自国民に対しつねに現状以上の物を与えようとしてきました。

消費者の権利も登場し、生活全般を代表する概念となり、働くことなどの使命感よりも、物質的満足にどっぷり漬かっている人々が増えてきているようにも感じられます。マスメディアをはじめとするもろもろの社会機構によってつくり出される欲望には限りがありません。

幸福の経済学がブームですが、その経済学の幸福とは、快感や満足をさらに充実させることであり、結局物質欲の最大限実現が目標とみえます。

こうした学問に対しては、かつてトルストイが「動物的生存にすぎない合理的意識」「人生は動物的生存のうちにあると解釈する誤れる科学」と評したことがそのまま当てはまりそうです。すでに、ニーチェは、「日の当たる窓ガラスに群がる蠅の幸福とその羽音」と評していました。

また別の哲人は、「常に自分自身に満足しているためには、ごく狭い頭脳でたくさんである。いつも幸せな人たちは、必ずどこかちっぽけな平凡な感じがつきまとうものだ」といっています。

- 3、幸福については、古来、人類の偉大な教師たちが語ってきました。紀元前1,000年頃と推定されているソロモン王の箴言（旧約聖書）には、「稼ぎが多くても正義に反するよりは、僅かでも恵みの業をする方が幸い」とか、「富に依存する者は倒れ、神に依存する者は栄える」などと記されており、財宝として長寿、富、名誉を挙げていますが、それらは、知恵を獲得してはじめて得られるものとされています。

アリストテレスは、人間の特性は、動物的生を除外した都市的なものがあり、そのあり方が全市民的拮据を考慮しての充分さに達したとき、自足する。この真の自足が人間の幸福であるといえます。紀元の頃のローマ皇帝、ストア派哲学者、マルクス・アウレリウスは、「人間の幸福と精神の平安は、徳からのみくる、徳とは、宇宙の自然に服従し、その自然のなすことを喜んで受け入れること」といっています。

富、名誉、権力のもつ陥穽についてはヒルティがつぎのように警告しています。「大きな財産、名誉、権力を伴う地位は、ほとんど絶対に、およそ幸福とは反対の心情の硬化を導くものである」

私どもの少年時代には、「艱難汝を玉にす」という格言がよく引用されました。近年まで「世のため、人のため」もごく普通の用語でした。

人生は苦難に満ちたものであり、それに打ち克つとき人は幸福にひたれるものではないでしょうか。さらに、幸福の有無は、人生の終わりにあたって判断されることであり、さらに後世、人々に何を残せたかが考慮に値すると

も先人は教えています。

4、このたびの大震災に関し、最近、被災地の生徒たちが「1000年後の命を守るために」をスローガンとして、ある快挙をなしとげたという報道がありました。それは津波で破壊された代表的建物を、後世に震災の教訓として保存することを町当局に決断させたということです。

町議会などでは、建物を解体すれば1億円余で済むのに、保存すれば将来にわたり数億円かかるとして消極的だったのを、広島原爆ドームを持ち出しでの子供たちの声が押しかえしたというのです。

「1000年後の命を守る」—この子供たちの直感＝構想は、本当に素晴らしく、21世紀の世界倫理を端的に言い当てていると思われまます。最大の困難に直面しているとき、大人の常識を突きぬける叡智を生み出したのは子供たちでした。本日、当センターのシンポジウムにおいてJR東日本、日立、トヨタ、東京ガスなど会員企業からCSR（企業の社会的責任）に関する活動報告がありました。いずれの報告も、社会的役割を自覚した独自性あるもので、感銘深いものでした。こうした社会貢献もまた、先進的に21世紀倫理の道を歩んでいるもので、私たちに、子供たちと並んで日本の未来に希望をもたらしてくれるものです。こうした多くの人達につながって私たちも歩んで行きたいと存じます。

平成25年5月22日

(一般社団) ぐらしのサーチセンター総会挨拶に加筆